

藤井懶齋年譜稿(二)

—慶安年間から延宝三年まで

承応元年【懶齋朋友と山崎闇齋との出会い】の項参照。

慶安二年(一六四九)己丑 三十三歳

□このころ、京都の儒者・川井正直、山崎闇齋と出会う。

承応元年【懶齋朋友と山崎闇齋との出会い】の項参照。

勝又 基*

慶安三年(一六五〇)庚寅 三十四歳

慶安年間(一六四八〜一六五二) 三十二〜三十六歳

□この年、菊池耕齋、久留米藩を致仕する。京都に戻って私塾を開く。

○慶安年中、大鳥井信兼邸で菅原道真の真筆を見て漢詩を作る。

正保元年の項参照。

承応年間(一六五二〜一六五五) 三十六〜三十九歳

△このころ、京都で儒医林玄伯に会う。

『北筑雑藁』下妻郡水田社の項による。慶安年中、二代久留米藩主・有馬頼利は水田社(筑後市水田字井手)と大宰府天満宮の宮司を兼ねていた大鳥井信兼の邸を訪ねた。そこで信兼は菅原道真の親翰二軸を披露した。懶齋が末席にいて作した漢詩も書き留められている。

『睡余録』第一百七条に「承応中、余、玄伯に洛に会ふ」(原漢文。東北大学狩野文庫本より引用。以下同じ)とある。

慶安元年(一六四八)戊子 三十二歳

□この年、京都の儒者・米川操軒、山崎闇齋と出会う。

林玄伯については同条に「玄伯、姓林、諱一之、大方庵と号す」とあり、第三百四十二条には「林玄伯、雍州伏見の人、久しく東武に客たり」ともある。また島原藩の儒医、吉田伯春はこの玄伯に医学を学んだ

らしい(『月下記』)。

藤井懶齋著「川井正直行状」(『事実文編』卷十九)には「一日、偶々林一之玄伯と会す。玄伯之に告ぐるに、痛飲を以て身を傷つけ、親を忘るるの罪と為す」(原漢文)と、川井正直が玄伯から痛飲は不孝だと教えられた記事が見える。正直はこれに従い、以来飲み過ぎす事は無かったと言う。

承応元年(一六五二) 壬辰 三十六歳

△このころ、はじめて山崎闇齋を訪れる。この頃までに陽明学に傾く時期あったか。

山崎闇齋から藤井懶齋へ宛てた書簡が四通残されている。『垂加文集』卷之二「答真辺仲庵書」「与仲庵書」、『続垂加文集』卷中「答真辺仲庵疑目」「答仲庵問目」がそれである。

このうち「暮春日」と日付がなされた「答真辺仲庵書」には次のような部分がある。

二月朔の書、上巳の後五日に至り承る。「海陸恙なくして還る」と。多幸多幸、疎慵旧の如し。遠念を賜はされ。年来、子、誤りて吾が名を聞き、去冬駕を枉げて蝸廬に過る。將に謂へり、「一たび無似を見て望望然として之を去ん」と。而に今却て博識力行考亭の道を任ずることを蒙る。虞らざるの誉、慚愧に勝へず。(原漢文)

懶齋が闇齋の名を誤って聞き、闇齋に会うなり立ち去ろうとした。そして後には考亭の道、すなわち朱子学の道を闇齋に任せた、というのである。懶齋が何をどう誤っていたのか今ひとつ判然としないが、同書簡

に「去冬面論の際、吾子其(引用者注：陽明学)毒に中るかと思ふ。今や朱を尊び、陸を惡み、無似を棄てず、將に与に講習せんとす」とあるのを考えれば、当時懶齋が陽明学に傾いており、闇齋も陽明学に理解があるとの予断を持っていたのであろうか。もしこの推測が許されるのであれば、闇齋に出会うまでの懶齋は、陽明学に幾分か理解を示していた事になる。随筆『睡余録』等での発言を見る限り、懶齋の陽明学に対する目は大変厳しいが、過去にそのような一時期があったとしたら興味深い。

また同書簡には「頃ろ先生陸を排するの言を輯め、分て上下両巻と為し、題して『大家商量集』と曰ふ。偶々友人取り去る。後便に之を寄せん」と、闇齋が先日編んだ『大家商量集』を闇齋から懶齋へ送る事を約束している。はたして「七月二日」の日付を持つ書簡「与仲庵書」では、『大家商量集』、此の間友人遠く遣すことを欲せず。則ち為に備書せしめ、即ち今便風に乗る」とあって、友人が複写して一部を郵送する事になったらしい。柴田篤「中村惕齋」(『日本の思想家十一 中村惕齋・室鳩巢』(昭和五十八年十二月 明德出版社)所載。以下「柴田稿」と略称)二十五〜二十七頁はこの箇所から書簡の執筆年次を承応年間と考証している。本稿の年次考証はこれに従った。

【懶齋朋友と山崎闇齋との出会い】

これも既に柴田稿の考証が備わっているが、山崎闇齋に藤井懶齋が初めて対面した承応年間あたりに、川井正直、米川操軒といった懶齋の朋友たちも相次いで闇齋と出会っている。

山崎闇齋は土佐で南学を学び、二十五歳で京都へ戻った後、正保四年(一六四七)、三十歳にして排仏の書『關異』を著す。また明暦元年(一六五五)には初めて講席を開いたという(『家譜』)。

米川操軒については中村惕斎著「米川操軒先生行状」に「二十二歳、山崎闇齋に見て経旨を講究す。是より交遊漸に広し」(原漢文。内閣文庫本による)とある。寛永四年(一六二七)生の操軒は慶安元年(一六四八)と、懶斎より四年早く山崎闇齋に出会った事になる。

川井正直(延宝五年十一月六日の項参照)については、『事実文編』巻十九所載の藤井懶斎著「川井正直行状」に「年五十に垂んとして、始めて学に志し、業を山崎敬義に請ふ」とある。仮に四十九歳とすれば慶安二年(一六四九)という事になる。懶斎より三年早い事になる。

彼らはこの二十数年後の延宝期(一六七三〜一六八一)、京都市中で儒書講釈に人気を博す事になるのである。

【儒学の師に関する諸説】

『国書人名辞典』など、藤井懶斎の儒学の師を山崎闇齋とする説は現在多い。しかし『先哲叢談』ほか、近世前々中期の人名録類には儒学の師について触れたものはない。この説を初めて記したのは『日本道学淵源録』(天保十三年(一八四二)序)ではなからうか。その記述は「初め王学を主とし、玄蕃頭有馬侯に仕ふ。後に帰正し、闇齋先生に師事す(中略)中村惕斎と漆膠^{しやく}の交を為す。遂に師説に背き、別に自ら一家を為す」というものである。この根拠となっているのが先に見た山崎闇齋書簡である事は想像に難くない。ただし、書簡中に闇齋に師事したと明記されている訳ではなく、「考亭の道を任ず」「将に与に講習せんとす」とある程度である。また山崎闇齋は元和四年生であって藤井懶斎より一歳年下でもある。懶斎と山崎闇齋との関係を「師事」と断ずるにはなお傍証を要しよう。

このほか大江文城『本邦儒学史論攷』(昭和十九年七月 全国書房)第八篇第一章「巷間鬱興の儒学」には、「嘗て業を柏原ト幽に受けた」

とある。つまり懶斎が人見ト幽軒に儒学を学んだと指摘しているのである。ト幽軒は慶長四年(一五九九)生、寛文十年(一六七〇)没、七十二歳。懶斎より十八歳年上である。もと京都の人であるが、寛永五年(一六二八)に初めて江戸に出て松平定綱の推挙により水戸藩に仕え、藩主徳川光圀の侍講になったと言う。彼が懶斎の師であったとなれば興味深い、これを裏付ける資料を知らない。明暦二年の項に述べる満田懶斎と混同したものであろうか。

また、清水浜臣著『泊泊筆話』(文化十年(一八一三)成)「藤井懶斎が読書余吟」の条は、斉明紀の童謡に関する解釈に関して、懶斎が友人である加藤宇万伎に助言を仰いだという逸話が書き留められている。加藤宇万伎は享保六年(一七二一)生、安永六年(一七七七)没、五十七歳で、明らかに時代が異なる。『新日本古典文学大系』注釈(中野三敏)も指摘する通り記憶違いであろう。

明暦元年(一六五五) 乙未 三十九歳

○この頃までに、筑後の清水寺や北野天満宮を訪れる。

ともに『北筑雑藁』による。本吉山清水寺は山門郡瀬高町本吉に在る天台寺院。ここへは「二十余年の前、余往て遊ぶ」と言う。そこでの感想は「台殿樹石、頗る洛東清水寺に模倣する者有り」と、京都の清水寺との影響関係を見出すものであった。京都に生まれ育った懶斎らしい感想と言って良いであろう。北野天満宮は三井郡北野町北野町中に鎮座する。ここは先公、すなわち二代藩主忠頼の放鷹の地があったため、しばしば訪れたという。そして自作の詩を記して、「此事、指を屈すれば二

十年に余れり」と述べる。

それぞれ、『北筑雑藁』の中村易張跋が書かれた延宝三年（一六七五）から二十年遡ると、この年までの事跡だという事になる。この明暦元年が次項に記すとおり二代藩主有馬忠頼の没年である所から考えれば、懶齋が「二十余年の前」「二十年に余れり」というのは、忠頼の在任時というぐらいの意味であろう。

□三月二十日、久留米藩二代藩主有馬忠頼（瓊林院）没、五十三歳。七月三日、三代目藩主頼利、四歳で襲封。

明暦二年（一六五六） 丙申 四十歳

□満田懶齋、『菅家文章』に識語を施す。

【満田懶齋との混同】

日本古典文学大系『菅家文章』は、その底本（川口久雄氏蔵本）を藤井懶齋旧蔵本とするが、誤りである。これについては、島本昌一「池田正式の論——怪異小説『あやし草』の作者をめぐる——」（『連歌俳諧研究』五十九 昭和五十五年七月 俳文学会）が、「その跋文は本書（引用者注：『儒林詩草』）に見出され、内容的にも満田古文であることに疑いはない」とすでに訂正している。満田古文については島本稿にも詳しいが、便宜上『日本古典文学大辞典』『儒林詩草』の項（植谷元氏執筆）から引用しておく事とする。

満田古文は、字意味、通称亀蔵、号懶齋。天和元年（一六八一）頃没。大和郡山藩本多内記政勝の家臣で、林羅山門の儒学者。羅山

の詩文集の編纂等に寄与し、池田正式著『靈怪草』、林宗甫著『大名所記』に跋文を寄せた。

号、年代なども一致し、川口本『菅家文章』の旧蔵者がこの人物であった事は間違いない。

また井上敏幸氏のご教示によれば、広瀬本家旧蔵書『靖節集』（請求番号六／十七。十巻一冊。刊記「寛文四甲辰仲秋吉旦／武村三郎兵衛刊行」）裏見返には次のような墨書が見えるとの事である。

右靖節集四冊朱点借懶齋先生之本而写之嘗聞倭訓者羅山先生所点也而以朱以朱分句読者懶齋先生之所手筆也。可謂兩難得者矣。可秘之
延宝四年歲舍丙辰仲秋廿六夕涉筆於短檠下

玄春松處

つまり該本は羅山と懶齋の点が施された『陶靖節集』を懶齋から借りて写したものらしい。これも延宝四年（一六七六）という年代や羅山との関係を考えれば、満田懶齋の事蹟と考えておくべきであろう。

万治二年（一六五九） 己亥 四十三歳

○七月六日、長女・信誕生。

「哀詞」（寛文七年閏二月十四日の項参照）中に「かれがむまれしは、よろづおさまれる二とせの、文月の六日なりけり」とある。「よろづおさまれる」は万治。懶齋の第一子である。

○九月三日、妻死去。

「哀詞」に「其年の長月三日になん母はうせける」とある。娘・信が生まれて約二ヶ月での出来事であった。のちに男子二人をもうけているので、後妻を持ったらしい。

万治三年（一六六〇） 庚子 四十四歳

○三月、久留米藩有馬家の系図を調査する。

『古代日記書抜』万治三年（一六六〇）三月の項に「御系図消失ニ付、真部仲庵へ為取調申渡、別帳ニ有之」とある。

【久留米藩士としての文事】

寛永十九年（一六四二）の項で見た通り、懶斎の久留米藩における役割は医師であった。しかしこの系図調査に代表されるように、文事に関するでも重用される所があったようである。『古代日記書抜』寛文十二年（一六七二）七月十三日の項には「一 瓊林院様被仰付置候景図ニ靈源院様、頼元様事無之候付、真部仲庵へ御書足被仰付可然由御意、御尤ニ存候段申上候」とある。瓊林院は二代藩主有馬忠頼、靈源院は三代藩主頼利、頼元は当代（四代）藩主。つまり二代藩主忠頼が真鍋忠庵（懶斎）に命じた有馬家の系図に、三代藩主頼利、当代藩主頼元を書き足すよう、懶斎が改めて命じられたと言う。

『古代日記書抜』寛文十二年（一六七二）七月五日の項には、「一 高良山記録、瓊林院様御隠密ニ被成候物ニ付、御人払ニ而真部仲庵へ御談せ御聞、御封被成預り役人へ御預可被成由御意、御尤之段申上候」という記事がある。高良山記録も有馬家系図と同じく、瓊林院（二代藩主）忠頼が懶斎に作らせた物であったのであろう。これを四代藩主頼元の代

になって懶斎から封をして提出させたというように読める。詳細は不明ながら、近世初期久留米藩において懶斎が重用されていた事を示す一例として記しておきたい。

また『月下記』巻一「吉田伯春」には、学に志し、語り合う相手を欲していた武富廉斎が久留米城下へ行き、藤井懶斎の名を知って会おうとしたが、「仲庵は城中に居、国法にて容易旅人に相逢事叶はず」と断られた逸話が載る。儒者としての懶斎と藩医としての役割の重さを表す事例と受け取っておく。

○七月、『二礼童覧』に自序を記す。

該書の詳細については刊行された元禄元年（一六八八）に改めて述べる事とし、ここではその成立年次についてのみ触れておく。刊本の無署名序に「万治三年七月日」とのみある事から、文章そのものは久留米藩医時代すでに成立していたらしい。寛文七年（一六七七）の項で見る『蔵笥百首』と同じく、久留米藩医時代に写本として完成し、致仕上京ののちに刊行された書物だという事になる。

なお久留米市民図書館蔵の写本（請求記号：国／十八／1。樺島石梁原蔵本）は、その序に「万治三年七月日／懶斎藤井蔵季廉著述」と署名が見える。しかし万治三年というこの時期は懶斎号を名乗るにしては早すぎる。また該本は識語に「万延元年庚申季秋写於学寮原本松岡氏／森浦樺島敬之写「印」」とある。筆写時期が遅い事や「著述」という書き方が不自然と思われる事を考慮すると、この懶斎号は後年における補記とすべきである。

寛文元年（一六六一）辛丑 四十五歳

□六月二十八日、父了現没、七十六歳。

高松真行寺蔵『雜記』に「寛文元年丑年六月二十八日往生、七十六」とある。

△このころから懶齋、三年の喪に服するか

前掲『月下記』卷三「藤井懶齋」②に、懶齋が父の没するに際して、三年の喪に服した事が記されている。武富廉齋の記したものとあれば、懶齋伝としての信憑性はかなり高いものとせざるを得ず、また記述内容も詳細である。しかし、久留米藩関係の資料ではこの休職に関する記事を見出す事ができなかった。

寛文六年（一六六六）丙午 五十歳

○このころまでに長男・革軒生まれるか。

寛文七年（一六六七）に書かれた「哀詞」（寛文七年閏二月十四日の項参照）に「ひとりはおのこなれど、まだいとけなし」とある所より逆算した。人物に関する詳細は元禄元年【家族〈三〉長男・革軒】の項参照。

寛文七年（一六六七）丁未 五十一歳

△このころまでに『蔵筥百首』の原稿成るか。

詳細は刊行された延宝六年（一六七八）の項にゆずり、ここでは成立年次についてのみ触れておく。『蔵筥百首』本文の成立時期について、『江戸時代女性文庫』六十七巻「解題」（平成九年五月 大空社 吉海直人執筆）は、本文中に万治二年（一六五九）刊『大和小学』を挙げる所に注目し、少なくともこれ以後の成立だろうとしている。これに一例を加えて、成立年次をさらに絞りたいと思う。「哀詞」（寛文七年閏二月十四日の項参照）には、娘の信が和歌を好んでいたので懶齋が「八代集の中より歌ぬきとりて私にこれを註釈して」与えたとある。ここに書かれている内容が、後に刊行された懶齋の著書『蔵筥百首』の内容と一致するのである。刊本『蔵筥百首』序文にも「しかるを今しるてなすは、家に一女児ありて、母さへなし。我いやしければうしろみその人をえず。せめてはかゝる事をだにしをきてとおもふなるべし」と、娘のための著述だという事が記されている。これらから、本来『蔵筥百首』は娘のために書かれたものであり、それを上京後に刊行したのだという事が分かる。

先述の通り信は万治二年（一六五九）年生である。よって『蔵筥百首』の成立時期は、そこから信が没するこの寛文七年（一六六七）までの間と絞る事ができる。

○閏二月十四日、長女である信、九歳にして疱瘡で死去。
 懶齋、追悼の和文「哀詞」を記す。

『石原家記』寛文十二年（一六七二）の項に間部仲庵こと懶齋述の「哀詞」が書き留められている。「ことし九になりける」娘の信が、「ひととひつじの春」に没した事を悼む和文である。やや長文にわたるが、ほとんど紹介される事のない文章であるゆえ、その全文を掲載しておく。句読点、濁点、改行等は私に付した。

哀詞

間部仲庵述

久留米御暇ノ後
 藤井蘭齋ト改ル

「悲しみの至てかなしきは、老て子におくるゝにしく事なし」といへるふる事、おほかたにきく。「すへしらば身にしらぬま」の心なりけり。我いそぢの浪打こへて、只ふたりの子をもたり。ひとりはおのこなれど、まだいとけなし。其あねにて、ことし九に成けるは、礼経の「婦徳なり」といへる言葉にとりて、信と名付てかしづき愛せしを、おもひがけずうしなひ侍て、袖のうへの玉のくだけたりけんよりもあさましく、心をおさむる道なく、身を置に所なし。つとふさがりたるむねのうちのやるかたなきは、人にかきくづしきこゑむもおこがましく、いはで只にもやみがたければ、「せめては硯にむかふ手習にもや」と、涙おしすりつゝ筆そめ侍る。

いでや其人がらは、かたちけしうもあらず、心ざまは、あはゞすなをにして、ことにふれて、いとこちたく、ねぢけたるおもひなし。つねはふるき歌をとなへ、さうしよむ事をこのめれば、八代集の中より歌ぬきとりて、私にこれを註釈してえさす。又漢の曹大家がふみのかんなにかきたるなど、日ごとにもてあそばしむ。おりぬひの

業はまだならふべき時にもあらねば、たれおしふとはなくて、唯人まねのみしけるほどに、いつとなく雛の衣ひとつふたつ、みづからつくりていでけり。さるは二とせのまへなれば、みな人あやしと云あへるを、我いぶかる心有て、秋来てもまだひとへなる衣の袖すこし引ほころばして、「まのまへにこれぬいてよ」といへば、ほゝえみて、はりめしいでゝぬいぬ。年たけたる人のわざにもおさゝおとらず、手も年のほどよりはすゝみて見へ侍れど、みづからは「はづかし」とおもひて、かきもちらさず。

かれがむまれしは、よろづおさまれる二とせの文月の六日なりけり。其年の長月三日になん母はうせけるを、すこし物のこゝろしれるほどより、つねにしたはしうするものから、言葉にはうちもいえず、月の末に至るごとに、「今いくつねて三日になるぞ」と、しばゝ人に問て、さうし物うちしほれたり。

七つに成ける年の有月の三日の日、人の入来て「いたうおさなきほどは、さうしはせぬ事ぞ」といひてければ、打なみだぐみて物をもいわざりしが、後は声もたてゝなきけり。かやうの事共、いはゞつきめや。親心のおろかさ、「よろづにいみじ」とよるこびて、世に又なきたからなどもてるやうにのみおもほへ、ひるは其たちる物ごしに目をとめ、耳をかたおけ、「よるの衣やぬぎすふる」と、おきて見ぬあかつきもなかりし。

しかるを今年ひのとひつじ（引用者注：寛文七年（一六七七）の春、世の人おほく、もがさといふもの煩ふときゝて、何となく心ばしりせらるゝころしも、二月の晦日むまのかひきゝすぐすほどに、「ぐしいたし」とてふしぬ。「けさ、ゆする（引用者注：洗髪）せしが、風にあたりけるにや」といへど、左にはあらで、身もいとあつ

く成行まゝに、もがさおほく出てけり。日にそひ、くるしみふかく、物くわず、くすりのしるし露も見へで、うつし心さへなくなりたれば、ありける人々、老たるも若も、こは如何すべき、悲みまどふ。からうじて、後のきさらぎ十日あまりになりてければ、めのとをだにありともしらざりしが、我をのみよぶふこゑの、あるかなきかにきこへけるを、「これなむちゝぞ」とて、かきいだけば、嬉しげなるつるおもゝち、いかならん世に忘るべきや。

十四日の、みの時計に身まかりぬ。されば「悲しみの至てかなしき、是にしくあらじ」とは、今ぞよくこゝろみてける。其日はさながらにて、人々名残をおしみ、十五日の暮つかたになん、襲斂はしけり。常に愛してもてあそびし物ども、おのゝ取いで、ひつぎの内にいる。我注釈してえさせし歌の一巻も、「此事なん、なやみあつびたまひても、猶のたまひいでしを」とて入ぬ。

くもりもはてぬおぼる月夜の、すこし打ふくまほほどに、ひつぎやり出せは、人々又声たかくさけべる中に、あそびがたきのめのわらはの、十になりけるが、めのとゝひとしくたふれ、ふしなきしづめるをみるに、人にもなきはふかゝりつるものぞ。今五とせ六とせもすぎば、いかならん人にも見せて、むまごまふけて見むまでの、我よはひこそあやまれつれ。たゞ今かゝるうきめ見んとはおもひきや。「よきことつまぬ家には、わざわひはおほし」といへる、ひじりのいましめをつゝしみおもふに、いとかう、ひがくしき父もたるゆへに、この人はうせけるならし。かれがつみなきをころして、これがむとくのむくひをしめせり。おそるべし。はづべし。かなしきかな。おもひつゞくれば、むねいたく、みだりごゝち、かきくらせば、いはまほしき事ども、みなもらす。うたは亡者のこのみつれ

ば、おりゝ口にうかぶまゝに、ひとつづゝ書付て、霊座のかたはらにさしおく。其こしおれ歌、

あだなりとうらみならびし花にさへ

先だつ人の春ぞかなしき

かくばかり浅きえにしをいかにして

おやとこの世にむすぼゝれけん

十にだにみたで先だつかなしきは

わが身ひとつぞおきどころなき

残る身は人もとひけり埋もれし

草場のかげよいかにさびしき

涙川せけどよどまらずみしさらば

身をなくばかり淵とならなむ

娘を喪った懶斎の痛切な悲しみが伝わる和文であるが、伝記に関しても多くの情報をもたらしてくれる資料である。娘の生没年など年次の判明する事柄についてはそれぞれの年に配したので参照されたい。

懶斎がこの娘のために『蔵筥百首』を編んで与えた事は前項で述べたが、これに続けて「又漢の曹大家がふみのかんなにかきたるなど、日ごとにもてあそばしむ」とある。これは『仮名列女伝』(明暦元年へ一六五五)刊)の事であろう。

【久留米藩における和歌指導】

右に見た「哀詞」と『蔵筥百首』の他にも、懶斎は久留米時代に和歌を作っており、それらは『北筑雑藁』『再往日記』等に収められる。この事自体は奇とするに足りないが、興味深いのは、懶斎が久留米藩で和歌を教えたという言及が存する事である。『久留米市史』(昭和五十七年十一月 久留米市)第七章第四節「文芸と美術工芸の振興」は、寂

源との交流に触れて、「両者ともに京都の人で、漢詩・和歌の道と同じくしていたので、両者の間に交友があり、この兩人により久留米の歌道は啓発された」とする他、「歌道は、二代藩主忠頼に招聘された真部仲庵が、国文・和歌を藩士に教えたのに始まる。米藩最初の女流歌人、西以三の女駒子は、仲庵の感化を受けたと言われている」と記している。

○秋、友人と日向神峽にて詩を賦す。

懶齋著の地誌『北筑雑藁』日向神の項に「寛文丁未の秋、余友人と往て観る」とある。日向神は福岡県八女郡矢部村にある矢部川の溪谷。景勝地である。

寛文八年(一六六八) 戊申 五十二歳

○このころ、久留米藩御近習抱えとなる。

『米府年表』寛文八年(一六六八)の項に左の記事あり。

一、公の御代小性組と申名無之。御近習と唱へ申候。児小性凡四十人程有之。一同眞部仲庵御抱に相成居候。

これも万治元年【久留米藩士としての文事】の項で見た、久留米藩における医学に留まらない活動の一つである。

□六月二十四日、久留米藩三代藩主有馬頼利(霊源院)没、十七歳。八月、四代藩主頼元(慈源院)襲封。

○七月二十五日、江戸へ発つ。

『古代日記書抜』この日の項に「内記殿・真部仲庵、今日江戸へ出足」とある。詳細不明。

寛文九年(一六六九) 己酉 五十三歳

○五月一日、寂源、高良山第五十世座主となるため筑後へ入る。そのさい書家・松井半平を連れ、懶齋と面会する。

【寂源との交流】

寂源は寛永七年(一六三〇)生、山城国上賀茂の祠官で大師流の能書家・藤木敦直の四男。出家して比叡山に入り、四十歳にして高良山座主となった。彼の生い立ちと高良山との関係、さらに僧として書家としての活躍などは、井上敏幸「『高良山十景詩歌』の反響」(『雅俗』第三号)〔平成八年一月 雅俗の会〕所載〕に大変詳しいので参照されたい。

井上稿の中でとくに興味深いのは『高良山十景詩』の成立に藤井懶齋が深く関与していた事が明らかになった点である。懶齋著の地誌『北筑雑藁』は、『高良山十景詩』について「今の座主法印寂源は其最も好き者。十境を扞び、定めて高良山十名所と為す」(原漢文)と、寂源の功績とするのみであるが、寂源自身は『高良山座主旧記之抜書』(高良山蔵)に「右十景之詩歌は、厥の初め、藤懶齋予が山扉を款く。日々相俱に丘壑の間を遊歴し、十奇勝を扞び、十名所と為し、好士をして伝へて吟詠せしむ」(原漢文)と、この選定を懶齋と寂源との共同作業として

いるのである。この期の久留米藩における数少ない文学者同士として、懶齋と寂源との交流は知られている以上に深かったと考えて良いであろう。

本稿では、この寂源と懶齋とを結びつける資料を一点加えたいと思う。『古代日記書抜』寛文九年（一六六九）五月一日の項は次のように伝えらる。

- 一、稲葉美濃守殿（引用者注：小田原藩二代藩主・稲葉正則）御家来松井半平と申者、病氣為養生高良山座主へ同道、爰元へ罷越、真部仲菴へ逢候由。御家老中へ懸御目度旨申候段、仲菴申出候付、城内ニ而は逢難候間、志岐（引用者注：有馬正盛）同道、仲菴方へ罷越令面会候

寂源の入山に際し、小田原藩の家来である松井半平が病氣療養のためにやって来て、懶齋に面会した。御家老中へ引き合わせたいと懶齋からの申し出があったが、城内では会いがたいので懶齋の家で面会したと言うのである。

松井半平については、小笹喜三著兼発行『書道大師流綜考』（昭和十六年刊）所載「家蔵大師流書家遺墨目録」「松井道輔」の項に次の記事がある（引用は『日本人物情報大系』第七十巻〈平成十三年 皓星社〉に拠った）。

大和の産、通称半平、号拙齋、小田原藩主稲葉正則の侍臣なり、壯時、君命を以て専ら道芳に就て書を学び、（温故会田辺密蔵氏調云、半平、明暦二年三月十九歳、御小姓被召出、同三年九月御給仕役御免手跡修行可致旨被仰付、御屋敷内に而難成修行候は、町家に而成共勝手次第云々、編者按、道輔世に寂源の弟子となす多し、此年寂源二十七歳にして、東叡山に在り修学中なり）兼ねて儒宗林氏の門

に出入す、のち寂源より唯一人の道統を承く、元禄五年十二月十八日死、享年五十五

つまり半平は寂源の書道の高弟であった。寂源の高良山入山が、仏教のみならず書道においても久留米藩に新風を吹き込んだという事になるうか。

なお、『北筑雑藁』には筑後坂東寺の僧良伯について「余、方外の交を執ること、殆ど二十有余年。唱和絶ゆる無し」と記している。久留米時代にはすでに批判的な発言を始めていた懶齋だが、寂源のほかにも数名の僧とは詩文を通じた交流を行っていたようである。

寛文十二年（一六七二） 壬子 五十六歳

△この頃、竹富廉斎と出会うか。

【竹富廉斎との交流】

武富廉斎については井上敏幸「竹富廉斎と『月下記』」（中村幸彦著述集）月報三〈昭和五十七年八月 中央公論社〉および同『佐賀の文学』第四章（一）の2「元禄の俗文芸」（昭和六十二年一月 新郷土刊行協会）に大変詳しい。廉斎は懶齋と同時代を生きた隣国佐賀藩の儒者であり、懶齋自身も『睡余録』でその行状を記している。

廉斎と懶齋とが久留米で交わった期間について井上稿は「寛文十二年以降のわずかの期間であつたらしい」としている。懶齋は延宝二年（一六七四）七月に久留米を離れているので下限は明らかだが、両者の出会いの時期に関する明確な資料は未見である。井上稿が寛文十二年（一六七二）からとするのも、筑後の記録『石原家記』の寛文十二年の条に武

富廉齋に関する記事が記されている事によるものであり、今後の資料出現によって、さらに遡りうる可能性もある。

さて両者の久留米におけるつながりは、先述の『月下記』⑤に「余も筑州は近隣の国ゆへ、其名を聞て訪寄、折節は経義を正し、持敬究理の事、葬祭の礼をも問商量り侍る」とあるように、時折懶齋宅を訪ねて学問について問いただすというような物であつたらしい。また懶齋が京都へ戻つた後も交流があつたようである（貞享三年の項参照）。

○七月五日、二代藩主忠頼の命で作成した高良山記録を当代藩主へ預けるか。

万治三年（一六六〇）【久留米藩士としての文事】の項参照。

○七月十三日、有馬家系図に三代藩主頼利・四代藩主頼元を書き足す。

万治三年（一六六〇）【久留米藩士としての文事】の項参照。

延宝元年（一六七三） 癸丑 五十七歳

○三月、久留米藩致仕を願ひ出る。

『北筑雑藁』中村易張跋に、「延宝癸丑の春先、先生病を以て致仕し、且つ骸骨を乞ふ」（原漢文）とある。「骸骨を乞ふ」は致仕を願ひ出ること。

【久留米藩致仕の理由】

懶齋の致仕の理由については、誤診を悔いたからという説が近世すでに流布していた。所見では雨森芳洲『橘窓茶話』（延享四年（一七四七）翠巖承堅序。天明六年（一七八六）刊）に、「藤懶齋医を以て久留米侯に仕へ、一日薬餌を誤用し、官に告て自ら黜て終身隱居す。君子なるかな」（原漢文）とあるのが早い。これは『諸家人物誌』（寛政四年（一七九二）刊）、『先哲叢談』にも採られている。

しかし懶齋著『北筑雑藁』では、先に見た中村易張跋だけでなく、自らも「將に病を以て帰老せんとす」としている。また久留米藩の記録に徴しても、『古代日記書抜』寛文十三年（一六七三）正月十五日の項に「一、真部仲菴連々病氣、偲も幼少ニ付、無扱、御暇相願候由、書付差出」とし、『石原家記』延宝二年の項に「○真部仲庵老頼ニ付而御暇被下、京都ニ被参候ト云」とする。懶齋の致仕の理由は、少なくとも表向きには病氣・高齢であつたと考えておくべきであろう。

また『月下記』③は、「医は小道なり」として、医学を捨てて隱逸と聖人の道を楽しもうとする決意が記されている。たしかに致仕以後の懶齋は医学を捨て、もとは余技であつた儒学へと専念してゆく事になる。病氣という表向きの理由とは別に、このような意志が本人にあつた事は認めて良いであろう。

なお坂本辰之助『有馬義源公』（明治四十一年 東京郵便通信社）附録「久留米教育小史」は、薬を誤用した説の後に「或は云ふ国老と議論合はずして去れりと」と記しているが、これについて書かれた近世の記事を知らない。

□十一月、中村惕齋著『比売鑑』成る。この後も断続的に増補を続け、惕齋没後に刊行される。

該書の成立は寛文元年（一六六一）とされて来た。しかし拙稿『比売鑑』の写本と刊本（『近世文芸』第七十号へ平成十一年七月 日本近世文学会）所載）でも記した通り、その自序の年記「ゆたけきふみといふ年のあらたまる年のしもつき」を寛文が次の年号へ改まった年、すなわち延宝元年（一六七三）と考えるのが正しい。該書の写本はいくつか残っているが、それを比較検討すると断続的に増補を続けていた事が分かる。その過程で貞享四年（一六八七）五月に刊行された藤井懶齋『仮名本朝孝子伝』の内から、孝女を描いた数章を取り込んでいる。

延宝二年（一六七四）甲寅 五十八歳

○秋、久留米より京都へ帰る。京都永昌坊あたりに住んだか。長岡恭齋・沢田氏・森口氏らを招く。

『北筑雑藁』中村易張跋に「甲寅の秋、佳恵を承け京師に帰休す」（原文）とある。致仕を願ひ出でたから実際に久留米を離れて京へ帰るまでの余裕は一年半ほどあったようである。

【居所へ】永昌坊寓居期

『扶桑名賢文集』（元禄十一年へ一六九八）刊）巻五に、長岡恭齋から藤井懶齋へ宛てた書簡「謝懶齋藤徴君書」が掲載されている。考証は後述するため省くが、元禄八年（一六九五）に書かれたものである。この中に次のような文章がある。

粵に往時を追観するに、叟、洛下永昌坊の側に寓居せるの日、真率の佳会憑て、僕も亦席に陪す。黙して指を屈すれば、凡そ十又五蚩を歴たり（原漢文）

つまり懶齋が「十五蚩」すなわち十五年前、「永昌坊」あたりに住んでいたというのである。永昌坊は「一坊三条より四条通迄四町朱雀通二坊大宮より西洞院迄三坊西洞院より東洞院迄四坊東洞院より京極まで凡て六十四町を永昌坊といふ」（『京の水』）。

元禄八年から十五年前といえばちょうどこの、久留米藩を致仕して京都へ戻った頃にあたる。長岡恭齋が「寓居」と言うのは、京都へ戻って本居を定めるまでの仮住まいという事であろうか。

【京都での佳会】

長岡恭齋からの書簡は、「真率の佳会」があった事を記し、続けて「沢田・森口の両老も偕に黄泉の客たり」と言う。長岡恭齋の他に、當時沢田・森口氏の両名もその会に列しており、書簡が書かれた元禄八年の時点では、すでに没していると言う。

長岡恭齋は京都の儒医。圭齋、丹堂、生白、同寅、赤泉逸士、豹蔵門などとも号した。父は『扶桑名賢文集』に松永昌三「謝長岡意丹大醫生」が載る儒医・長岡意丹。『文翰雑編』に漢詩が載るほか、宮川一翠子らとの和漢連句も多い。拙稿「宮川一翠子覚え書」（『語文研究』第八十一号へ平成八年六月 九州大学国語国文学会）所載）参照。

沢田とは京儒でのち加賀藩に抱えられた沢田訥齋（宗堅）の事かと考えたが、彼は宝永四年（一七〇七）八十四歳まで生きた（『訥齋集』）ので、元禄八年時点でまだ亡くなっておらず合わない。『睡余録』七十三に「洛の四條磨工木屋氏」とあってその書き入れに「号八郎兵衛称沢田保房」とある。こちらがふさわしいように思う。森口氏は不明。

○この頃から、京都で儒書講釈を行う。

京都へ戻った懶齋は、市中で儒書講釈を行っていたようである。雨森芳州『橋窓茶話』には「余童艸の時、米川儀兵衛、中村迪齋、藤井懶齋、俱に經学を以て京師に教授す。信従の者衆し」(原漢文)とある。雨森芳洲は寛文八年(一六六八)生、宝暦五年(一七五五)没、八十八歳。「童艸の時」は、延宝期(一六七三〜一六八一)あたりを指す事になる。この儒書講釈がいつまで続いたかは明らかでないが、延宝六年(一六七八)に米川操軒が没し、貞享元年(一六八四)に中村惕齋が伏見へ転居した事などが目安となるであろう。

延宝三(一六七五)乙卯 五十九歳

○春、『北筑雑藁』成る。

該書は懶齋編による漢文で書かれた筑後地方の地誌である。写本一卷一冊。自序(年記署名等なし)、中村易張跋(延宝乙卯春甲辰)を付す。翻刻は筑後遺籍刊行会『筑後地誌叢書』(昭和四年、菊竹金文堂)に備わる。

久留米市民図書館には三本を蔵するが、その全てに頭書が付されている。『本朝神社考』などからの引用が主であるが、日向神について記した項では本文中に「詩三四章、和歌数首有り。余、皆之を忘る」とあって、この地で作った詩歌を失念した由が記されている。これに対して頭注では「真子、日向の神に題する詩に曰く」として漢詩二首を挙げてい

るのは興味深い。懶齋が去った後の筑後の地で書き加えられて行ったものであろうか。なおこの頭注は諸本によって異同があるが、このうち一本(新有馬文庫六〇六三)には「于時宝永三丙戌季春中旬依尊命書写之」とあるので、宝永三年(一七〇六)ごろには頭書が為されていたと推測される。

自序には「余將に病を以て帰老せんとす。故に邦内の山川、名地、故事、郷俗の凡そ嘗て目染耳濡する所の者、妄に略之を録して以て遺忘に備ふと云」とあり、懶齋が久留米藩を致仕するにあたって編んだものであると分かる。『久留米市史』第二卷第七章第三節は「久留米藩最初の地誌」とする。

該書は地誌の体裁を整えてはいるが、筑後地方の名所旧跡が網羅的に挙げられている訳ではない。また説明も故事来歴にはあまり筆を費やさず、懶齋自身の意見や思い出、その地で詠んだ和歌・漢詩などが多く記されている(慶安年間、明暦元年の記事など参照)。つまり多くの人々に供する地誌というよりは、懶齋の個人的な思い出を地誌の形式に託して記したものである。

たとえば童男草女こと童男山古墳(福岡県八女市山内)に関する章段では、自作の「童男草女弁」を掲載する。ここで懶齋はその意義について諸説ある童男草女古墳について、「冢壙」すなわち墓穴だと断じる。その上で、上古の風儀が親に厚かった事を思い、それが中世の仏教によって薄らいだとする。そして今日から童男草女の名を捨て、孝行塚とすべきだと論じている。

(未完)